

## 子育てフォーラム青木2016

### ～自己肯定感を家庭・学校・地域で育てるには？～

保小中一貫教育委員会事務局 林 理恵（青木中学校教頭）

「本当に今日は来てよかった。とっても素晴らしい話が聞けてよかった」「先輩のお母さん方からいろいろアドバイスをもらいました。参加してよかったです！」等々、フォーラムに参加された皆様の声です。

11月26日（土）、村内外より150名余りの皆さんにご参加いただき、子育てフォーラム青木2016が開催されました。「子どもも大人も、家族も地域も先生も、みんながしあわせになるために自己肯定感を高めてみませんか？」をキャッチコピーに、子どもたちだけではなくご家族、地域等の皆さんの幸せ度も話題にしながら、子育てについて共に考えました。

保小中一貫教育委員会では、青木村の教育目標「心豊かでたくましい子どもの育成～社会力（生きる力）を育てる～」を目指し、保小中の連携を通して実践を積み重ねてきました。今年度は、より保護者の皆さんの声を反映した活動を…との願いから、前年度までの組織を改編し「アンケート委員会」を「子育て委員会」としました。「5か条委員会」

「フォーラム委員会」「小中連携委員会」「保小連携委員会」「特別支援教育委員会」と合わせた6委員会が、それぞれ独自の活



動を進めながらテーマ実現を目指してまいりました。

今回のフォーラムでは、5か条委員会発表から始まりました。保育園、小中学校で日々実践している「あいさつ」。子どもたちの地域の方々、先生達との様子をご紹介いただき、会場全体が思わず笑顔になり温かな空気で包まれました。

講演会では、ソチパラリンピック出場の山崎福太郎さんのお母様で前上田市教育委員の山崎順子さんに「自分らしく夢にはばたく・夢の応援団」と題してお話をいただきました。福太郎さんは先天性絞扼輪症候群で右前腕と左下腿を半分以上欠損して生まれました。そんな彼が中学校時代には柔道部に所属し、他の部員同様にハードな練習を積みながら心身共に逞しく成長していきます。山崎さんには福太郎さんが生まれた時のご経験や成長過程をまっすぐにお話しいただきました。「子どもたちに出会えてよかった。私を母にしてくれた。成長させてくれた」との山崎さんの言葉は、会場でお話を拝聴した多くの皆さんの心に残りました。



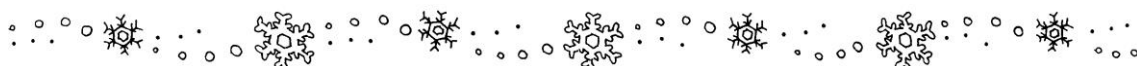
アトラクションでは、昨年に引き続き小学校の金管バンドと中学2年生の皆さんより素敵なハーモニーをご披露いただきました。会場全体が一体となって拍手をしたり、子どもたちの真剣な表情に思わず胸が熱くなったりとフォーラムの主役である子どもたちからたくさんの感動をいただきました。休日に参加してくれた小中学生の皆さん、ありがとうございました。



そして、フォーラムの後半は各委員会による分科会です。全4分科会で子育ての悩みやアドバイスを互いに出し合ったり親子で楽しむための問題に取り組んだり、各会場から熱心な話し声が聞こえてきました。分科会の企画運営を通して、保小中及び村の皆様との繋がりが更に近く、より一層密になります。やりたいことがどんどん出てくる、そんな分科会です。詳細は、各分科会からの通信次号の報告をお読みください。

その他、会場には姿はありませんでしたが、フォーラムに参加される保護者のお子様のために、保育園では託児、文化会館では信州大学 YOU 遊未来の学生さんに合同で企画していただいたイベントを並行して行いました。子どもたちを預け、安心してご参加いただけたのではないかと思います。また、今年度よりあおきっ子応援団の皆さんにもお力を貸していただき、飲み物を振る舞っていただきました。「ホットカフェモカ」や「フルーツ味のラッシー」などを幾種類もご用意いただき、参加者はホッと一息ついて味わいながら、分科会に参加することができました。

以上報告させていただいたように、多くの皆様にご参加いただき、共に子育てについて考え語り合う貴重なひとときを過ごすことができました。参加して下さった皆様、運営に携わって下さった皆様、すべての皆様に感謝申し上げます、報告と致します。



## 5か条委員会発表

### (保小中一貫教育5か条委員会)

5か条委員会では、あおきっ子教育ポイント5か条の中から一つを選んで、子育てフォーラムで発表し、来場された皆さんに保育園、小学校、中学校の様子を知っていただくことにしました。今年は、あいさつです。あいさつは、家庭教育と大きく関わる生活習慣です。まず、家族内で「おはようございます」や「いただきます」などあいさつをはっきりとした声で言いあうようにして、あわただしくても、「いってらっしゃい」や「おやすみなさい」と、優しい口調で大人がまず声がけをすることが大切です。第2条「あいさつ、思い切って言ってみよう 互いになっこりいい気分」が村内のどの家庭でも広がることを願っています。





地域の皆さんにあいさつする



先生とのスキンシップもかねてく保育園



校長先生とハイタッチ



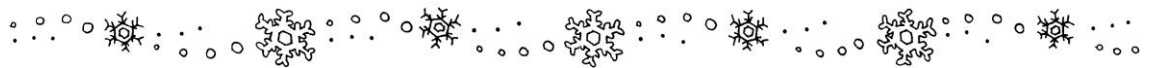
毎朝、職員室に来て、あいさつ <小学校



生徒会であいさつについて話し合いました



生活の中にあいさつを位置付けて <中学校



## 講演会「自分らしく夢にはばたく一夢の応援団」(概要)

講師 山崎 順子さん(前上田市教育委員)

私には3人子どもがおりますが、今日は一番上の子ども、福太郎についてお話をさせていただきます。彼は2014年の2～3月に開催されたソチパラリンピックに日本代表選手として出場いたしました。種目はスキーマルペンです。アルペンには立位とチェアスキーとブラインド(視覚障害)のクラスがありますが、福太郎は立位のクラスでした。回転(スラローム)と大回転(ジャイアントスラローム)に出場し、結果は30位と26位でした。



福太郎は1992年1月30日に1600gで生まれました。生まれつき右前腕欠損、左薬指第一関節先欠損、左足下腿2分の1欠損の体で生まれてきました。障がい名は先天性こうやく輪症候群といます。私は妊娠6か月で破水して入院、その後絶対安静。妊娠9か月に帝王切開で出産することが決まりましたが、生まれてくるまで障がいのことは全くわかりませんでした。生まれてきたわが子を見て非常に驚きました。この先どうなっていくのか…不安、悲しみ、つらさでいっぱいでした。たくさん泣いてもがきました。その時に私は何をして何を主人と話したのか…全く覚えていません。ものすごく苦しくてつらい時期でした。もうこれ以上人間の悲しみはないだろうというところまでおそらく落ちていました。でも私にとってはとても大切な時間だったと今は考えています。

その時に私の味方になってくれたものが3つありました。ひとつは母乳です。母乳は出そうと思っても出るものではないし、止めようと思っても止められるものではないのですが、どういうわけか私の母乳は飲みきれないほどたくさん出たのです。2つ目は近所の看護師の方に「泣いちゃだめ!」と言われたことです。この言葉は家族には絶対言えない言葉だと思うのですが、その言葉の中に、「母になったのだから強くなりなさい」と言われている気がしました。3つ目は、私は病院で毎日泣き続けていたのですが、ある時、涙がもう出ないというところまできたのです。その時に「なんでこんなに泣いているのだろう」「障がいってこんなに泣かなければならないほど悪いことなのか」という気持ちが私の中から少しずつ湧いてきました。6か月で破水し、もしかしたら生きられなかったかもしれない命…でもこの子は命を絶やすことなくこの世に生まれてきた…。小さい体から「生きたい!」という力強い意志を感じました。“奇跡の命”だと思いました。福太郎は自分の手や足を削ってでもこの世に生まれ、私たちに会いに来てくれたのだと思うようになりました。今思えば、生まれた直後の

非常につらい時期があったからこそ、このような気持ちになれたのだと思います。

福太郎は生後6か月の時に手術をし、7か月から義足を付け始めました。この子は寝返りができるのか…お座りができるのか…ハイハイができるのか…。私は「あるべきものがないのだからできないよね」と最初から思っていました。だからできた時には「えっ、できるの?」「すごい!」と心から思い褒めることができました。驚き、うれしさをそのまま伝えることができたのです。人は障害があってもこんなに強く生きられるのだと思いました。

塩尻小学校では、水泳、野球、バスケット、サッカー、スキーなどなんでも体験しました。友だちがやっていることは何でもやってみたい、自分にできないことがあるなんて許せない、そんな好奇心旺盛で負けず嫌いな子でした。6年生の時には自分の力を試したい、と児童会長にもなりました。



上田第二中学で選んだ部活は、まさかの柔道でした。私たち親は今まで本人がやりたいことはどんなことでも応援してきましたが、この時ばかりは反対しました。「どうやって片手で相手と組むの?」「義足の足を蹴られたら義足が飛んでいっちゃうよ!」親は、はなから無理という気持ちでいました。でも入部届を本人が出してしまったのだから仕方ありません。そして入部後すぐに右鎖骨を骨折。その時、私の喉まで出かかった言葉は「だから柔道部に入らなければよかったのに」でした。でも本人は「痛い」とか「つらい」とか、そういうことは一切言いませんでした。私は、本人が一番つらくて痛いときに、親はその心にさらに傷をつけるような言葉を言うべきではないと気付きました。親の私は、けがが早く治るように生活のフォローをし、今までと変わらない生活を送れるようにするべきだ、と思いました。自分の思いだけを子どもにぶつけてしまうと子どもを傷つけてしまうことにつながる、と感じました。

2年生のときに会った顧問の先生が、福太郎の人生を決定づけることになりました。「お前を障がい者扱いしないからな」「一人の柔道部員として接するからな」という先生の言葉で、「今まで周りの人は僕のことを、障がい者というフィルターを通して見ていたんだけど、この先生は福太郎という僕自身を見ていてくれる」と感じたそうです。できないことを障がいのせいにするのではなく、できないことはあるけれどもその中でやり方を工夫し方法を考えて取り組む、ということをおっしゃっていただきました。また、今まで周りの人が自分にたくさんの配慮をしてくれていたことにも気が付きました。この時この先生がどんな思いでこの言葉を言ってくださったのか。タブロイド紙に手記を寄せていただいたものがありますのでご紹介したいと思います。(中略) 家族の知らないところでたくさんの愛情をかけてくださっていることを知り、とてもうれしく思い感謝しました。

柔道の公式戦には、金属のものを体につけている場合は出場できない、という規定



があります。義足を付けては出られません。ここで義足が文字通りの障がいになってしまいました。しかし、中学の先生方や柔道の先生方に非常に動いていただき、教育的配慮ということで、上小大会、東信大会に出場することができました。

担任の先生も福太郎の性格をよく理解してくださり、「おまえならもっとできるはずだ」といつも愛情を持った厳しさでずっと背中を押してくださいました。そのおかげで生徒会長も務めることができました。このお二人の先生とは“将来先生になりたい”という夢が膨らんだ大切な出会いになりました。

高校では中学とは異なり、公式戦には出られないということが分かっていたのですが、黒帯をとりたいという思いがあり柔道班に入部。先生方のご尽力により2年の時になんとか初段を取ることができました。ここで、本人はもうこれ以上柔道の道では自分を強く高めていくことはできない、と悩み始めます。そんな時、障がい者のスキーナショナルチームの監督に声をかけていただきました。全日本の選手達が練習するホームグレンデが菅平にあったのです。柔道には視覚障がい者のための戦う場はありましたが身体障がい者のための場はありません。でもスキーには身体障がい者のために戦う場があり、パラリンピックという世界最高の場もあるということを知っていただきました。高2の冬から練習を始め、中学の社会の教員を目指していたので信大の教育学部に進学しました。



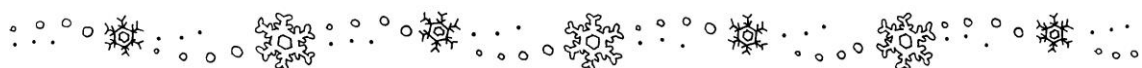
大学4年の時、パラリンピックに出場するには出場の権利が必要でしたが福太郎はそれを持っていませんでした。周りの友人たちは社会にでる準備を始めています。自分も卒業後の準備をするべきか、それともソチに向かって練習するべきか。私たちにも相談がありましたが、今までと同じように、あなたが決めた道ならどちらを選んででも父も母も応援するからと伝えました。本人はとても悩んでいろいろな方に相談したと思います。そして、自分の夢が少しでもかなえられる可能性があるならやるしかない！と大学4年の後半を休学することにしました。出場の権利を得るためには国際レースに出場してある程度の成績を収めなければなりません。これまで海外遠征などしたことがありませんでしたが、それからはワールドカップなどを転戦しました。パラリンピックの出場は、第一次選考では決まらず、2014年1月、ぎりぎりの第二次選考で決まりました。ずっと追いつけてきた夢がかなった瞬間でもありました。小さな頃から今まで出会った多くの方々が、福太郎をここまで導いてくれたのだと思いました。生まれた時はどうなるか全くわからない真っ暗な未来でしたが、こんな未来になったのです。可能性は無限に広がっているのだと思いました。

ソチでの成績は先ほどお話しした通りです。福太郎にとっては自分の弱さを改めて知ることになりました。技術的な面もそうですが、他の選手と自分では精神的なもの、気概が大きく違っていたと言っていました。負けず嫌いな性格ですから、今まで自分の弱さを認めようとせず弱さに気が付かないふりをしてきました。でも、自分の弱さ

を知ればそれをどうすれば良い方向にむかうのか考えることができる、ということに気が付きました。また、今までやりたいことに向かってまっしぐらに進んできましたが、それは周りの多くの人に支えられてきたからできたのだ、ということに改めて実感しました。

そんな経験から「僕はボクだから」「もし手や足があったらそれはボクじゃない」「障害があるからこそ多くのことを経験できたし、障がいがあるからこそ今がある」ということに改めて気づくことができました。

私たちは夢の応援団としてどうすればいいのでしょうか。結果をほめるのではなく、そこに向かっていく心の動きをほめる、心からほめる、そしてこちらの心も素直に伝える、ということが大切だと思っています。それから多くの出会いを大切にする。出会いとは何となく過ぎてしまいがちですが、その出会いをとっても大事なものだと思自分が意識できたのなら、その出会いはとても貴重で大切な運命の出会いになります。これは人との出会いもそうですし、人からかけてもらった言葉もそうだと思います。自分の子どもの心を信じて、待って、待って、まだ待って…。大変ですが待って静かに背中を押す。そうすることによって子どもは夢に向かってはばたいていけるのではないかと思います。今、私は3人の子ども達と出会えてとても幸せです。彼、彼女たちは私を母にしてくれたし、私を成長させてくれたし、私に多くのことを経験させてくれました。これからも静かに背中を押す、夢の応援団でいたいと思っています。



**編集後記** あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。本号と次号で昨年行われた「子育てフォーラム」の様子をお伝えいたします。アンケートでは、『初めて参加しましたがとても良かったです。子育ての難しさを日々感じていましたが、今日聞いた話を家でも早速やります』『山崎さんのように強いお母さんにはなれないけど、目標にしたいと思いました。“心を褒める”意識していきたいです』など保護者の方の感想の他、『とても素晴らしい内容なのでもっとたくさんの方々に参加して欲しい』という声も多く聞かれました。来年も多くの保護者の方の参加をお待ちしています。